

THE KUROHYO



DOUBLEDOWN4

黒豹 全集

特命武装検事・黒木豹介

黒豹ダブルダウン4

門田泰明





光文社文庫

黒豹全集
特命武装検事・黒木豹介

黒豹ダブルダウン 4

著者 かど た やす あき
門 田 泰 明

1993年6月20日 初版1刷発行
2004年6月10日 3刷発行

発行者	篠 原 睦 子
印刷	堀 内 印 刷
製 本	ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Yasuaki Kadota 1993

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-71709-8 Printed in Japan

【R】本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

日本音楽著作権協会許諾番号 第9361025-802号

光文社文庫

黒豹全集

黒豹ダブルダウン4

特命武装検事 黒木豹介^{ひょうすけ}

かど た やす あき
門田泰明



光 文 社

目次

第十九章	沙霧 ^{さぎり} よ生きていたか！	5
第二十章	アメリカ合衆国攻撃作戦	65
第二十一章	ああ国枝 ^{くにえだ} 官房長官死す	105
第二十二章	キャリー・ウッドワードの悲劇	156
第二十三章	動き出した精鋭暗殺集団	211
第二十四章	強烈ダブルダウン二丁撃 ^{うち} ち	282

口絵イラスト・渡辺文也

第十九章 沙霧さぎりよ生きていたか！

1

黒木くろきは、強く抱きしめた沙霧に、まぎれもないものを感じた。

艶つややかな髪かみの、かぐわしい香りは、間違まちがいなく沙霧のものであった。やわらかな肩、うなじのあたりに漂ただよう甘い肌の香り、それはまぎれもなく彼女であった。

二人を包んでいた『サンクチュアリー』の曲が尽きたのか、流れる夜霧に運び去られるようにして消えた。

静寂せいじやくが訪れる。ひとの心に、しみ込むような静寂であった。

黒木の時がゆっくりと過ぎていく。

沙霧は、頑丈な黒木の胸の中で、身じろぎ一つしなかった。

まるで黒木に会えた喜びに耐えているように、ひっそりと息をひそめている。

黒木は過ぎ行く時——しかしそれは、彼が思っているほど経ってはいなかったのだが——を止めるかのようにして、沙霧の体から離れた。

だが彼の両手は、沙霧の頬を優しくはさんで、離さなかった。

黒木は、沙霧であることを確かめるようにして、彼女の顔を覗き込んだ。精悍な彼のマスクは、沙霧への慈愛にあふれていた。

街灯の薄明かりを映している、沙霧の瞳が、黒木を見返した。

黒木の表情が曇った。衝撃を受けたような、曇りかたであった。

彼は、沙霧をこの場に送り届けた、三人の白人に問いかけるような暗い視線を流したあと、もう一度、沙霧を見つめた。

沙霧の瞳は、黒木を捉えてはいたが、「黒木豹介」を意識している目の色ではなかった。憂いをたたえた、目の色であった。あるいは、空白状態の目の色とも言えるだろうか。

「私だ……わかるか？」

黒木は、右手を彼女の頬から離し、豊かな黒髪を撫でてやりながら、訊ねた。

三人の白人は、そうすることが今の黒木に対する礼儀でもあるかのように、視線を力なく足元に落とし、その顔に苦渋くじゆうの色を満たした。

黒木の問いに、沙霧は反応を見せなかった。高貴な美しさを見せている彼女の表情には、針の先ほどの変化もなかった。

痛々しいほど変化がなかった。白痴美という悲しい形容がもし許されるなら、黒木と向かい合っている沙霧は、まさしくそれであった。

「なんてことだ」

沙霧の異常を知って、黒木はいたわるように彼女を抱き寄せた。

三人の白人のうち、三つ揃いのスーツを着た初老の男が、三、四歩足を進めて、黒木の横に立った。

ひと目で、軍の高官とわかる、目つきの鋭い、姿勢のいい紳士であった。

彼は、おそらく日常はきつい顔つきなのであろう、その面おもてに、精一杯の辛つらさを覗かせて、黒木に右手を差し出した。

「国家防衛幕僚長のドン・フィッシャーです。はじめまして……」

黒木は、沙霧の肩を抱いたまま、ほんの少し体を横に開いて、米軍最高首脳の右手を、黙っ

て握り返した。

「ワシントン陸軍病院の副院長、ダニエル・シュライヤックです。外科を専攻しています」

「大統領の直轄下にある陸軍生命科学研究所の所長、スコット・ベルジョンソンです」

二、三メートル離れて控えていた二人の白人が、申し合わせたように、遠慮がちな口調で名乗った。二人とも四十半^{なか}ばで、いかにも医学者らしい印象の人物だ。

黒木は、彼らに向かって、目で頷^{うなず}き返したあと「感謝します」と言葉少なに言った。彼らが、死んだはずの沙霧に対して、どれほど全力投球の手を尽くしたか、想像するまでもなく黒木にはわかった。

「二人は、ミス高浜^{たかはま}を救うために生命の限界に挑戦してくれました。そのことを、先^まず私に言わせてください」

国家防衛幕僚長は、二人の方を振りかえって、これもまた遠慮がちな口調で言った。ドン・フィッシャーは、言葉が続けた。

「陸軍病院の副院長であるシュライヤック博士は、陸軍生命科学研究所の最高顧問を兼務し、一方のベルジョンソン博士は、大統領の主治医の地位にあります」

国家防衛幕僚長に身分を紹介された、二人の医学者は、よろしく、と言うように日本式に丁

重に腰を折った。二人とも、黒木のそばへ近づき過ぎることと、多弁であってはならないことに、気を配っているような顔つきであった。おそらく、黒木への接しかたについて、大統領から事前の注意があったのだろう。

「どのような経緯でミス高浜の命を救ったかの詳細は文書にしていますので、のちほどそれをお読みください」

ドン・フィッシャーは、ベルジョンソン博士を見て頷いてみせた。

博士は彼のそばにやってくると、手にしていたアタッシェケースをあけ、タイプライターで打たれた分厚い文書を取り出した。

ドン・フィッシャーがそれを受け取ると、博士は再び元の位置に戻って、ダニエル・シュライヤックと肩を並べた。

「大統領命令によって、ワシントン陸軍病院と陸軍生命科学研究所は、最高のスタッフを揃え、ミス高浜の救命に総力をあげました。しかし……」

国家防衛幕僚長は、文書を黒木に手渡しながら、申し訳なさそうに口を噤んだ。くやしそうであった。

「ミス高浜を、完全な状態に戻して、あなたにお引き合わせすることは、できませんでした。」

どうか、われわれの力が及ばなかったことをお許しください」

「いいえ、閣下。彼女がこうして、私の腕の中にいること自体、奇跡というほかありません。このことを知れば、倉脇首相もどれほど喜びますことか」

「V・N事件では、合衆国はあなたに対して大きな借りをつくりました。その恩返しのために、大統領は、考えられる救命手段のすべてを用いてミス高浜を蘇生させるように、と厳命されました。その大統領命令がどれほど「厳命」であったかについても、文書に詳しくしたためてあります」

「文書は、あとで読ませていただくとして、高浜沙霧の現在の状態は？」

「すべての記憶を失っており、言語中枢になんらかの異常があるのか言葉も喋れません。精神状態は安定しているものの、濃い霧の中にひとり佇んでいる状態、と言えはよろしいでしょうか」

「自力では何も判断できない状況に置かれている、という意味ですね」

「そう解釈していただいて、結構かと思います」

「それでも……それでも神は、沙霧を私の手に戻してくれた」

黒木は、ドン・フィッシャーに聞こえぬ低い声で呟き、胸の内側からこみ上げてくるものを、

ぐっと堪えた。

彼女の肩にまわした手に力が加わり、夜霧の中で光る鷹のように鋭い目が、涙で潤んだ。

奇跡であった。本当に奇跡であった。最高のスタッフを揃えた米陸軍医療団の全力投球があったとはいえ、奇跡以外の言葉が、黒木には見つからなかった。

黒木は、シュライヤック博士とベルジョンソン博士の顔を見くらべながら訊ねた。

「記憶を失い、言葉も喋れないということは、脳のどこかに損傷があるということになるのでしょうか」

シュライヤック博士が、首を横に振った。これから述べる自分の所見に、絶対的な自信を抱いているような、首の振りかたであった。

「最新の設備による検査では、脳そのものには異常は認められません。ほかに幾つかの方法で精密検査を試みましたが、判定はいずれも正常です。つまり正常であるからこそ、われわれには手の打ちようがなくなってしまったわけです」

「博士のおっしゃる正常とは、普通の人と変わらない状態、と理解してよろしいのですね」

「そのとおりです。私たち普通の者と、まったく同じ状態とご理解ください」

「それだけに元の彼女に戻るのは難しい？」

「はい、難しいと言えます。ですがわれわれ医学者は、難しさは易しさと紙一重かみひとえ、という考えかたを常に持っておりますので」

「ということは、小さなきっかけで、元の彼女に戻る可能性は残されていると？」

「充分に残されている、と私もベルジョンソン博士も、確信しています。文書にも詳しく記されていることですが、そこでわれわれは、大統領命令を受けたCIA幹部の協力のもと、ある実験を行ないました」

「彼女に精神的刺激を与える実験でしょう。CIA幹部に私の行動を監視させ、私が事件に遭遇する現場へ彼女を連れて行った。ちがいますか」

「無謀な精神的実験であったことは、おわびします。ですが、われわれとしては、それ以外の方法は、もう考えつかなかったのです。どうかご寛容ください」

ドン・フィッシャー国家防衛幕僚長が、軽く手を上げて、発言はその程度にしておきたまえ、という表情で博士を見た。

博士が頷いたあと、国家防衛幕僚長は、いたわりの目で沙霧を見つめながら、ゆっくりと口を開いた。

「大統領は、なんとしてもミス高浜を元に戻してから、あなたにお引き合わせするのだ、とい

う考えをお持ちでした。ですが、彼女に与えた精神的実験の結果、幾つかの不思議な反応を得ましたので、むしろ早いうちに彼女をあなたに委ねたほうがいいかもしれない、という結論になったのです」

「そうでしたか。ともかくホテルに戻って、じっくりと文書を拝見し、彼女に対する接しかたを、私なりに考えてみることにします。このご恩は決して忘れることはないでしょう」

黒木は自分から握手を求め、差し出された米軍最高首脳の手を強く握った。

「ミス高浜の件に関する限り、われわれは何時いかなる場合でも、協力を惜しみません。たとえお二人が地球上のどこにおられようと、要請があれば飛んで参ります」

「ご配慮を嬉しく思います。大統領に、くれぐれもよろしくお伝えください」

「倉脇首相にもよろしく。今夜の件については、当地時間の午前七時頃に、大統領から倉脇首相宛に、親書が届くはずですから」

「それでは、これで……」

黒木は、二人の博士に、目で会釈えしやくをすると、沙霧の肩を抱いたまま踵かかとを返した。

それまで、堪えていた涙が、黒木の目尻から、こぼれ落ちた。

「沙霧……私が元に戻してやるぞ。必ず」

黒木の眩きに対して、沙霧は反応のない瞳を彼に向けるだけであった。

夜霧が、サラサラと音をたてて流れている。

黒木は、夢でも錯覚でもなく、確かに自分の腕の中に、沙霧の体の温もりがあることを感じながら、ジャガーXJを停めてある場所へ向かった。

木槌で板を打つような、二人の乾いた靴音が、濃霧の街に響いた。

乳色の世界に、二人の邪魔をするものは、なかった。

夜は、二人のために、沈黙していた。

黒木には、沙霧が記憶を失い、自力では何も判断できないことが、まだ信じられなかった。それでは、自分の危機を救ってくれたこれまでの彼女の突然の出現は、いったいどういうことなのか。

その行動そのものが、ドン・フィッシャー国家防衛幕僚長の言う「幾つかの不思議な反応」なのであろうか。

黒木は、そういった疑問について考えをめぐらしながら、沙霧が生きていた、という名状し難い喜びを噛みしめていた。

ゆらめく霧の向こうに、ぼんやりとジャガーXJが見えた。

深夜の濃霧とはいえ、狙撃される心配は絶無、とは言えない。

現に黒木は、ウッドワード博士の自宅があるアパートメント・ハウス『CASABLANCA』の駐車場で、濃い朝靄の中、正確な狙撃に遭遇している。

彼は、ジャガーの前で足をとめると、夜風で少し乱れた沙霧の髪にそっと触れて語りかけた。

「沙霧、これが私の車だ……自分でドアをあけて、助手席にすわってごらん」

幼児に対するような、やわらかな黒木の口調であった。優しさよりも、悲しみをたたえた話しかたであった。

沙霧は、彼の言葉に、ひとすじの光さえ見せなかった。黒木が何を言っているのか、理解さえできていないかのような、あまりにも遠い表情であった。その遠さが、彼女の美しさを、一層神秘的なものにしていた。

黒木は、助手席のドアをあけ「すわりなさい」と、彼女の肩を軽く押した。

沙霧は、素直にすわった。不意に現われては、幾度か黒木の危機を救った、あの俊敏な様子はどこにもない。

黒木は、運転席にすわり、爆発物探知システムが、異常をキャッチしていないのを確認して